

ユニケージ<sup>®</sup>開発手法導入レポート



usp lab.

# ビームス

衣料・雑貨製品の開発・輸入・販売／売上高 706 億円 (2016 年 2 月期)



要件を最も深く理解しているユーザーによるシステム開発が理想型  
内製化の推進が情報システム部門の存在感を大きく高めました。

## システム内製化の取り組み推進により 開発期間とコストの大幅な圧縮を実現

株式会社ビームス 渡辺秀一氏、石田雄大氏 インタビュー

オリジナルおよび輸入品の衣料や雑貨を販売するビームス (BEAMS)。モノを通して文化を創る“カルチャーショップ”を目指し、国内外に有する店舗やEコマースサイトなどのチャネルを通じた商品・サービスの展開により、若者の風俗・文化をリードしている。同社では、2015年以來、ユニケージ開発手法をベースとしたシステムの内製化を推進。その取り組みの経緯や成果について、同社情報システム部に聞いた。

——システムの内製化に取り組んだ背景にはどのような課題がありましたか。

渡辺：従来当社では、業務現場の要求を情報システム部がとりまとめて、Sler など外部

のベンダーにシステム構築を依頼するというスタイルをとってきました。そこで直面していたのが、我々ユーザー側の要件をベンダーに正しく伝え、理解してもらうことの難しさです。実際には、要件の理解に齟齬がある中で、開発が進んでしまうことも少なくなかったというのが実情。当然、できあがったシステムは、当社の意図したものとは異なっており、結果、改修が必要となって、コストが見込みから大幅に膨らんでしまうということも珍しくはありませんでした。このような問題を解消するには、要件を最も深く理解しているユーザー、つまり我々自身の手でシステム開発を行うことが理想であると常々考えていました。

開発未経験者にもかかわらず  
2カ月の講習で基礎を習得

——ユニケージ開発手法を採用するに至った経緯についてお聞かせください。

渡辺：もともとは、我々と同種の小売業における内製化の事例などを、関心を持って参照する程度で、具体的にどうすればいいかといった検討を進めてはいなかったのですが、2015年4月のはじめ頃、USP研究所の営業担当者からユニケージ開発手法の紹介を受けました。よくよく聞いてみると、我々が以前に参照していた同業者の事例などもユニケージ開発手法を採用したものだだったので。

検討の結果、当社としてもぜひチャレンジ

## 【図】内製化により構築したレポートシステムの画面例

「事業別月次売上検索 条件入力画面」

「事業別月次売上検索 結果画面」

これまで Excel によって人手により編集・作成されていた各種レポートの生成を、ユニケーj開発手法をベースにシステム化。ビームスでは、さらなる開発効率の向上を念頭に、画面の表示方法や検索条件などについて、各レポートシステム間での標準化も進めているところだ。

してみる価値があるということで、早速、導入の運びとなり、ユニケーjサーバーの構築を進めるかたわら、私を含む2名が USP 研究所で講習を受けて技術習得に当たることになりました。

もっとも、私自身について言えば、当時、プログラミングの知識などは皆無で、もちろんシステム開発の経験もありませんでした。ところが驚いたことに、相応の努力は重ねたにせよ、2015年4～5月の2カ月程度の講習の中で、開発の基礎を身につけることができたのです。一般的なプログラミング言語などに比べても、ユニケーj開発手法は習得のしやすさにおいても出色だったという印象です。

## システム内製化の取り組みが 業務上の概念標準化への契機に

——内製化により取り組まれた具体的なプロジェクトについてご紹介ください。

**渡辺:** まずは、業務の現場で利用されている、レポートの画面や帳票のシステム化に着手することにしました。それまで、それらレポートの作成は、売上管理や商品管理、仕入管理、発注管理などの基幹システムから必要なデータを抽出し、業務担当者が Excel で加工・編集を行うことで対応していましたが、そうしたプロセスのシステム化を目指すことにしたわけです。



情報システム本部  
課長  
渡辺秀一氏



情報システム本部  
情報システム部  
主任  
石田雄大氏

**石田:** その準備段階として、基幹システム上の必要なデータをユニケーjサーバー上に展開するという仕組みの構築に着手。我々が講習を受けた直後の2015年6月から、USP 研究所のコンサルサービスによる支援を仰ぐかたちで取り組みを進め、10月末頃までに完了させることができました。そして、翌2016年2月からは、我々の内製化による最初のアプリケーションとなる、店舗の予算・売上実績の月次レポートिंगについての開発をスタート。2カ月程度の工期を経て、4月には本番稼働の運びとなりました。

**渡辺:** 実のところ、その開発途上、重大な問題が浮上しました。というのも、これまで各担当者が Excel で作成していたレポートでは、その基礎となる業務上のいくつかの概念の認識にブレがあったことが明らかになったのです。例えば、ある担当者は5つの商品を同一カテゴリでくくっているのに、別の担当者はそのカテゴリには6つの商品が含まれると捉えている。あるいは、「新規店舗」が開店後どれだけの期間を経て「既存店舗」として扱うかといった基準にも担当者ごとにバラつきがありました。

新システムの構築に当たっては、そうした問題を1つひとつ潰しながら、様々な業務の概念にかかわる標準化を進めていきました。言い換えれば、ユニケーj開発手法を採用して内製化に取り組んだからこそ、そうした問題点が明確化でき、レポートिंगの精度向上につながる標準化に着手する機会が得られたわけです。

**石田:** その後も引き続き、それまで店舗ごとに Excel により対応していた予算策定や、事業部別の予算管理のレポートिंग、さらにはエリアマネージャが自ら担当する店舗の状況を把握するためのレポートの作成

など、システム化を次々に進めてきました。そうした中で、ユニケーj開発手法の優位性をあらためて実感させられることもしばしばです。例えば、基本的には10個程度のコマンドを駆使すれば、我々がやりたいことがすべてできてしまうというのも、ユニケーj開発手法ならではのメリットでしょう。

## 業務現場の課題解消に向けて “頼られる”情報システム部門へ

——ユニケーj開発手法によるシステムの内製化がもたらした成果についてお聞かせください。

**渡辺:** 内製化の実践が、システム開発を外部ベンダーに委託する際に比べ、コストや工期の大幅な圧縮に直結していることは言うまでもありません。重要なのは、これまで主にコスト的な観点から見送らざるを得なかった、業務現場の細かなシステム化のニーズにも応えていけるようになったということ。そうした中で、現場のユーザーあるいは経営層の中にも、自分たちの抱える業務、ビジネス上の課題解消に貢献するシステムの実現が、より身近になったという認識も広がっています。もちろん、その構築を担う情報システム部に対する信頼感や期待も、確実に大きくなってきていることを、身をもって感じています。

——今後の取り組み予定について教えてください。

**渡辺:** 現状では、業務側からのシステム化要求が待ち行列を成している状況で、それら要求への対応を1つ1つ着実にこなしていくことになります。それと並行して、ユニケーj開発手法を使いこなせる技術者リソースの拡大にも努めていきたいと考えます。またその一方で、ユニケーjで開発したシステムの運用・管理の強化も今後に向けた重要なテーマ。USP 研究所には、そうした面も含めて、さらなる支援、アドバイスを期待しています。



会社名：株式会社ビームス

所在地：東京都新宿区北新宿 4-16-12

資本金：2000万円

従業員数：1,386名（2015年2月時点）

ユニケーj開発手法に関するお問い合わせは

有限会社ユニバーサル・シェル・プログラミング研究所

東京都港区西新橋3-3-3ペリカンビル3階

TEL：03-3432-1174 E-MAIL：koho@usp-lab.com

https://www.usp-lab.com